

【投稿論文】

## ゴーゴリ『鼻』と生神女福音祭

近藤昌夫

[ *Резюме* ]

«Нос» Гоголя и Благовещение Пресвятой Богородицы

КОНДО Масао

В этой статье мы рассмотрели значение даты в повести Гоголя «Нос».

25 марта, когда из хлеба, разрезанного цирюльником Иваном, появился нос майора Ковалёва, а с лица Ковалёва исчез нос, в церкви празднуют Благовещение Пресвятой Богородицы, по народному календарю - день «открытия земли».

День «открытия земли» считали началом весны, пробуждением земли ото сна. Согласно поверьям, в этот день из земли выходят на свет насекомые, змеи, лягушки, черти, которых ненавидел и боялся сам Гоголь.

Когда удивление цирюльника Ивана сменилось страхом перед ложным обвинением, то его страх совпал с трепетом майора Ковалёва, избегающего внимания других.

Но Пресвятая Богородица оказала Ковалёву благодетельство. Говорят, в день Благовещения отпущенные на волю птицы вместо людей передают ей их желания. В этот день в Казанском соборе Нос, то есть желание Ковалёва, молился, словно птица (вспомним, что Гоголь комплексовал по поводу своего носа, а также то, что его фамилия произошла от названия птицы «гоголь»), поэтому на лице у Ковалёва появился новый нос.

Необыкновенно странное происшествие в повести «Нос» основано не только на фантастических историях Гофмана и Шамиссо, но и на традициях православного и народного праздников, возбуждающих страх и комплекс самого писателя.

キーワード：ゴーゴリ『鼻』、グリャーニエ、生神女福音祭、大地開きの日、放鳥

はじめに

短編『鼻』(1836)は、不条理の物語、「幻覚的な寓意の文学」、幻想性を保持したパロディなどと評され、同時代のロマン主義的幻想を読み換えた先見性あるいは前衛性が注目される傑作である<sup>1</sup>。

そもそも虚構なのだから、あえて鼻出沒の道理を詮索する必要もないし、アネクドート好きのゴーゴリが好んだ省略三段論法の煙に巻かれてしまえばそれで十分なのかもしれない<sup>2</sup>。だがここでは、テキストに記された日付の意味を、ゴーゴリの作品に共通して指摘できる祝祭あるいはロシアの縁日すなわちグリャーニエの原理に関連づけて解釈し、なぜ鼻が、ペテルブルクという都市空間で繰り広げられるナンセンスな物語の中心を占めているのか、考えてみよう。

祝祭の原理というのは、「笑う者も笑われる」あべこべの世界あるいは相対的社会を明るみに出す共同体の基盤のひとつで、ゴーゴリの世界の土台を成している。

たとえば『外套』の主人公アカーキ・アカーケヴィチが、自分の分身のような着古した外套を見て思わず笑うと、仕立て下ろしの外套が強奪され、直訴した長官に一蹴される。だが、その後アカーキは幽霊になって長官の心胆を寒からしめるのだった。また、犬のメジイに嘲笑される『狂人日記』のポプリーシチンは、スペイン王を名乗り役所の上司を笑うが、精神病院送りになってしまう。あるいは『肖像画』の貧乏画学生チャルトコフは、金で築いた画壇の頂点から世間を笑うが、真の才能を目の当たりにして狂気の淵に転落してゆく。そしてこの『鼻』でも、皮肉屋でもったいぶった8等官のコワリョフが、5等官になりすました自分の鼻に嘲笑されている<sup>3</sup>。

とりわけ『鼻』は、たとえばナボコフが、ゴーゴリの嗅覚主義をさらにはゴーゴリ自身の鼻をも、「広くはカーニバル流のあけすけなユーモアに、狭くは鼻をめぐるロシアのユーモアに関連した文学的トリックと見做すほうが、はるかに道理に適っている」と述べているように<sup>4</sup>、あるいは後藤明生が、バフチンの「ゲロテスク・リアリズム」に触れて「バフチンのいう『笑う ↔ 笑われる』の関係で、どうしてもわたしが思い出してしまうのは、ゴーゴリの中篇『鼻』なのである」と述べているように<sup>5</sup>、他の作品以上にカーニバルあるいは祝祭との関連性が指摘される作品である。

おそらくそれは、きわめてリアルな日常に鼻の出沒というあまりにも突飛で非現実的な出来事が、ごく自然に起こるためだろう。そしてこの明白すぎるカーニバル性ゆえに、これまでテキストに記された日付と祝祭との関連づけがなされてこなかったのである。

事件の起きた3月25日は、生神女が主の降誕を受け容れたことを記憶する生神女福音祭、すなわち天が地に、地が天に反転した受胎告知の日である。と同時に、民間では暦の大きな節目となる「大地開きの日」にあたる。

小論では、まず物語における鼻の役割と空間の関係について、すなわち『鼻』のペテルブルクについて述べ、次にそもそもなぜ鼻だったのか、ペテルブルクと鼻の関係を、日付に注目して明らかにしてゆく。

### 1. 人工都市と自然の物語

「奇怪このうえない事件」が発生した3月25日の朝、かなり早くに目を覚ました床屋のイワンは「熱々のパンの匂いを感じた」。ここでおそらく読者も鼻腔に焼きたてのパンの香ばしい薫りが甦り、生暖かい自分の鼻をふと意識するに違いない。

イワンは焼き上がったばかりの大地の恵みを手に取ると、ナイフでまっぴたつに切り分け

た。おや？何か白っぽいものがある。指で触ってみた。うん？硬いぞ。ナイフでほじくり出してみると、なんと鼻だった。イワンは腰を抜き、何度も目をこすっては触ってみた。

間違いなく、8等官コワリョフの鼻である。

週2回、水曜日と日曜日に顔をあたっていたのですぐにそれとわかったのである。イワンの顔は恐怖に固まった。

吹き出物のある、肉と骨の白っぽい切片が、身体という自然とイワンの内面の結びつきを繰り返して主張しはじめる。

パンを切る行為に続いて起こる、ちろん切られた、それも見知った鼻の出現は、因果関係を誘発し、イワンはまったく身に覚えがないにもかかわらず、怯えはじめるのだった。

恐妻家のイワンは、妻プラスコーヴィヤの前で後で何とかするとその場を取り繕おうとするが、プラスコーヴィヤは断じて許さない。この世で何よりも恐ろしい妻に、とっととその臭いものを捨ててこい、この私が警察に密告してやろうかと頭ごなしにどやされ、イワンはあらためて事の重大さを思い知るのだった—— そうだ、この汚らしくて臭い身体の欠片によって真っ先に疑われるのは、誰でもない自分だ。妻の話では、髭剃りの際に鼻を強く引っ張りすぎるといふ苦情が少なくとも3件寄せられているという。証人もそろっているというわけだ。

密告され、起訴されるかもしれないという不安は恐怖に膨らみ、人事不省に陥ったイワンは、全身がわなわなと震えるのがわかった。

埒が明かないことに拘っている閑はない。イワンは、理不尽な出来事の原因究明よりも事態の收拾すなわち鼻の遺棄に動き出す。

ところがこれが儘ならなかった。知人に声を掛けられたり、往来の目がうるさかったりして捨て場探しは難航する。苛立ち、怯えが益々募ってゆく。

捨て場探し、つまり身体の移動によって、荒唐無稽な出来事はますます現実味を帯びてゆく。

やっとネヴァ川に鼻を捨てられたとき、イワンはまるで自分の肩から「10 プード」の重荷がいっぺんに下りたような気がしたのだった。

「10 プード」というのはおよそ160キロ強の重さである。想像に余るとてつもない重量ではない。現実感がある。たとえばドストエフスキー『分身』の主人公ゴリヤートキン氏が抱えていた不安は「500 プード」すなわち約8トンだった。

「10 プード」は強調表現ではなく、やっかい事を背負い込む羽目になった自分とその元凶であるコワリョフの体重の和ではないか。イワンは、恐怖に押し潰されそうになりながら、たった一個の、ちっぽけだが薄気味悪い肉片で結ばれてしまった自分とコワリョフを、苦々しい思いで呪っていたはずだ。

鼻を捨てた瞬間、イワンは思った——これで証拠隠滅、コワリョフとの関係はふっ切れた。ようやく日常が戻り、イワンはほっと安堵の吐息をつくのだった。

ところがどっこい、現場は警察分所長に目撃されていた。

イワンは心臓が止まる思いだった。

消し去ったものが、まるでゾンビのように甦り、160キロの恐怖で執拗にのしかかってくる。イワンはふたたび縮み上がる。

このように第1章では、身体という自然と心が、抜き差しならぬ関係にあることが繰り返して述べられているのである。

切り取られた自然が多面的に、また詳細に描かれ、恐怖という心と表裏一体であることが一度ならず強調されるのはなぜだろう。

それは、嗅覚・視覚・触覚を動員した、鼻の感覚的・即物的・有機的特性の描写と、イワンに恐怖をもたらす、猟奇的ともいえる反社会的出来事とによって、物語の舞台であるペテルブルクを「自然」との関係で際立たせようとしたからではないか。出来事が突発的であることも、巡査や警察分署長が暗示する管理社会と、その管理社会が時に飼い慣らそうとしたり、時に排除しようとしたりする異質な相手が「自然」であることの仄めかしのように思われる。

実際、警察の目や物見高い人々の好奇の目によってイワンの心に160キロの心理的重圧をかけたのが、ペテルブルクの出来事だったのは、この街ならでは理由がある。

ペテルブルクは、ロシアを西欧化するために、あるいはロシア人を西欧人に改造するために、18世紀初頭にピョートル大帝が不退転の決意で造った人工都市である。厳しい気候の沼沢地に大量の石を投じて造成・建造された建都の歴史は、洪水に象徴される自然との闘争の歴史だった。

街の中心部には、軍の中心だった海軍省から3本の矢のように直線の通りが放射線状に走っている。その両側には、皇帝の住まう冬宮と高さがほぼ等しい石造建築群が整然と立ち並び、冷たい壁が、足もとを歩き来する人々を見下ろしている。

軍と皇帝から四六時中監視されているような威圧感・緊張感は、見た者をぞっとさせる老商人の肖像画の不気味な重圧感にも等しかったのではないか（ゴーゴリ『肖像画』）。

イワンに恐怖をもたらす鼻が、西欧近代を極端に目指した帝都と強いコントラストを放つのは、ペテルブルクが人工的に造られた脳の産物であり、自然の対極にあるからなのだ。

北ロシアの自然を謳った作家プリーシヴィンという。

ペテルブルクの落日の美しさはたとえようもない。だが、どうだ、この人工的な都市に住む大多数の人びとは、たとえようもない貧しさを抱えて、落日の美しさなど眼中にないではないか。太陽からも空からも、色彩からさえ切り離されている。自然というものから完全に切り離されているのだ。<sup>6</sup>

自然と人工の、この鋭い対立が、自然としての人間に矛盾と幻想をもたらすのである。

管理された都市の威圧的な空気と住人の好奇の目に曝されながら、街を右往左往するうちに増長されていった恐怖がイワンに促す行為は、そのまま、自然をねじ伏せ、排除してきた人工都市ペテルブルクの姿に重なる。

『鼻』の訳者である工藤正廣氏は、ゴーゴリはネフスキー大通を歩いている人々に「〈鼻〉の流れ」を見ていたのではないかと指摘しているが<sup>7</sup>、ゴーゴリはパンの中から突如現れ、はじめは熱いがぼろ切れの中で次第に冷たく、固くなってゆき、しまいにはネヴァ川に捨てられてしまう身体の断片で自然を異化したのだろう。「尊敬すべき市民」である床屋のイワンも実は自分の顔に鼻がないことに、あるいは自然を失ってしまっていることに、それこそ

ふだん自分の鼻の存在を忘れてるように、気づいていないのである。

街を造るのは人だが、街も人を創る。

身体としての自然と心とが表裏一体であること、そして『鼻』が、自然を排除した人工都市ペテルブルクとそこに住む人々の物語であることを告げる第1章は、霧に包まれ、切り取られたように幕を降ろす。これもまた、運河の町ペテルブルクの物語に相応しい。

イヴァン・ヤーコヴレヴィチはさっと青ざめた……ところがここで事件は、すっかり霧に覆い隠されてしまい、その後何が起こったのか、一切何もわかっていないのである。

続く第2章では、コワリョフ少佐のちよん切られた鼻が持主と対面し、反抗する。その後、神出鬼没の鼻によって帝都は上を下への大騒ぎになり、第1章で示された、ゴーゴリのペテルブルクとペテルブルク市民の姿がいつそう具体的に明らかにされてゆく。

## 2. 自然の反乱と人工都市の市民たち

突然の鼻の出現によって床屋のイワンの背筋が凍りついたのと同じ頃、鼻の持主も驚愕、混乱し、恐怖に震えあがっていた。

八等官のコヴァリョフはかなり早く目を覚ますと唇でもって「ブルル……」とやった。これは目が覚めたときに彼がきまってやることだったが、ただしなんでこうするのか、自分でもよく解らなかったのである。コヴァリョフは伸びをし、テーブルの上に立ててあった小さな鏡を自分のところへ持ってくるよう言いつけた。ゆうべ鼻にできた吹出物を見たかったのである。だが仰天したことに、みると彼の顔には鼻のかわりにまったく平らな面があるだけだったのだ！（吉川宏人訳）

コワリョフは、大学出の8等官とは違う種族の、「リガからカムチャッカに至る」すべての8等官のひとりである。自然豊かな故郷コーカサスを捨て、地位に相応しい仕事と持参金付の結婚相手を求めてペテルブルクにやってきたのだった。見栄、高慢、色欲、嘲笑、偏見、欲望、短気、粗暴などが一緒くたになった愛すべき俗物である。

なぜ突如鼻がなくなったのか、当のコワリョフにもさっぱり覚えがない。

いかにも荒唐無稽で理不尽な悲劇である。

だがこの突発的な出来事を、「尊敬すべき市民」である床屋のイワンに降りかかった、やはり突発的な出来事に照らしてみよう。

イワンは、朝食にパンもコーヒーも両方欲しいと思ったらパンすらお預けとなり、かわりに鼻が出てきて恐怖のどん底に落ちたのだった。

コワリョフは、仕事も持参金付の妻も両方欲しいと思っていたら鼻を失い、どちらも手に入られない状況に陥り、5等官のなりであらわれた自分の鼻に度肝を抜かれ、恐怖に縮み上がるのだった。

よく似ている。

う。

警察分所長が届けてくれた冷たい鼻が元どおりに顔に収まらないのは、コワリョフが、親から授かった自然としての鼻ではなく、ペテルブルクにふさわしい虚飾や虚栄を追い求めているからなのである。それはペテルブルク市民も同じで、彼等も第1章で床屋のイワンが暗示していたように、あるべきものがないのに、気づいていないだけのことなのである。

そうこうしているうちに第2章も第1章同様、切り取られたように幕となる。

第2章は、ペテルブルクという街同様、ペテルブルクに創られた市民にとっても、自然が排除された異質な対象であることを明るみに出しているのである。

見方を変えれば、イワンにもコワリョフにも恐怖を与え、とうとう町中を混乱に陥れる鼻は、自然が反乱を起こしていることになる。

自然が蜂起した日は3月25日だった。

### 3. 3月25日または自然の反乱

テキストにはふたつの日付が記されている。3月25日と4月7日である。

まず、物語で継起する主な出来事を書き出してみよう。

3月25日早朝、床屋のイワンがコワリョフの鼻を捨てにいく。同じ頃、コワリョフが鼻を探しに出る。鼻を発見するも見失い、区警察を訪れるが署長は不在だった。すぐに新聞社に馬車を回し、人捜し広告を依頼するが断られてしまう。自宅に戻り塞いでいると、警察分署長が鼻を届けにやって来る。くつつかないので医者を呼んだものの無駄だった。翌日コワリョフは、ポットーチナ夫人に宛てて「本日中に」鼻が戻らなければと期限を切って告訴を仄めかす手紙を書き送る。夫人の返信は潔白を証明していた。その後4月7日に鼻は元どおりになる。

これら一連の出来事は速いテンポで展開し、主な出来事は1日に凝縮している。

3月25日から4月7日にかけての13日間の出来事と考えるのは不自然だし、ちょん切られた鼻も変質あるいは腐敗してしまうだろう。

床屋のイワンもいつものようにコワリョフ宅にあらわれ、何か隠し事でもあるのかおどおどした表情を浮かべている。

2日間の出来事だったのではないか？

そう考える根拠はまだほかにもある。

身体の一部が持主を笑うあべこべは、主従が反転するカーニバルの笑いであり（バフチン）、述べたようにゴーゴリの諸作品に共通する特徴である。反転が起こるのは祝祭日で、3月25日は生神女福音祭（受胎告知）にあたる。ジラクトールスカヤによれば、5等官の鼻がカザン聖堂に現れたのは、勅令により当時の官吏はカザン聖堂の生神女福音祭に参拝することが義務づけられていたからだという<sup>10</sup>。つまり第1章も第2章も同じ日に起きた出来事だったのである。

では日付をどのように考えたらいいだろう。

すでに指摘されていることだが、3月25日と4月7日を、ユリウス暦とグレゴリウス暦の意図的な取り違えと考察してみよう。ポットーチナ夫人の名前パラゲーヤを、重要な手紙であったにもかかわらず、アレクサンドラ宛にしているゴーゴリである。

正教会では今でも旧暦すなわちユリウス暦が用いられている。いっぽう、ゴーゴリが愛し、カトリックの「告知の日」にも度々足を運んだローマでは新暦が用いられていた<sup>11</sup>。

世界が反転する日といったが、ペテルブルクを舞台にしているこの物語の世界 МИР / MIR が反転すると РИМ / RIM すなわちローマになる。

19世紀、ふたつの暦のずれは12日であった。したがって旧暦3月25日は新暦の4月6日にあたる。出来事は3月25日に発生し、翌日3月26日に、あるいは新暦の4月6日に発生し、4月7日に終息したのではないか。

だとすれば『鼻』はコワリョフの夢物語だとする解釈も可能である。実際、自筆清書原稿（1835）でゴーゴリ自身が夢だったと締めくくっていることもあり、わかりやすく合理的な解釈の余地も残されている。「しかしそれでは一向に面白くない。」<sup>12</sup> ゴーゴリは夢をすでに使い古しの文学的手法と見なしており、翌36年の『現代人』で「夢落ち」の断りが削除された。以来、ナンセンスはナンセンスのまま『鼻』は今日まで様々に解釈されてきたのである。

確かにナンセンスな事件であることは動かしがたいが、ここでは3月25日と鼻の関係を探してみよう。

鼻が消失した翌日、つまり3月26日（4月7日）に、ポットーチナ夫人の陰謀を疑ったコワリョフは、一刻も争う返信を要求した。夫人の潔白判明後、コワリョフは微唾み、まだその日のうちにふと目を覚ますと鼻が戻っていたのではないか。その後コワリョフは床屋のイワンに髭を剃らせ、表敬訪問のため官房を訪れたのだろう。

コワリョフがイワンに顔をあたらせていたのは水曜日と日曜日ごとだった。コワリョフは、鼻が木曜日まで無事だったことは覚えている。鼻喪失後、呼びもしないのにイワンがあらわれるのだから4月7日は日曜日とするのが自然である。

日曜日にコワリョフはポストを望んでいた官房で上司に面会できたのだろうか。

17世紀半ばの役人は12時間勤務だった。土曜日は昼まで働き、日曜日は午後から登庁していたという。その後役人は、ピョートル大帝が作成した官等表に厳しく秩序づけられることになったが、ゴーゴリの時代は勤務時間も1日8時間程度に短縮されていた。閣僚クラスの執務時間は緩やかだったが重要な案件がある場合は休日返上だった<sup>13</sup>。

栄達のため毎日ペテルブルクを歩き回るコワリョフも、表敬訪問を休日とは無関係な仕事のひとつとみなす下級官吏のひとりだったから、勤務のない日曜日に官房を訪れたとしても不思議はない<sup>14</sup>。コワリョフが狙っていたのは、副知事のポストだったから、行政関連の仕事に職掌する官房第5部所轄の部局だったのではないか。そこには同類の辛辣な8等官の姿もあった。

いずれにせよ、第2章同様出来事の展開がややめまぐるしくなるが、2日間の出来事と考えても物語の中の現実とは矛盾しない。

ゴーゴリは異なるふたつの暦の導入によって3月25日の出来事であることを強調したのである。

日付をめぐるのは、ワイスコプフが生神女福音祭の聖体礼儀と関連させ、床屋のイワンによる厳粛な儀礼の模倣と鼻の出現という奇天烈な出来事とのギャップにゴーゴリの笑いを指摘している。またウスペンスキーは、架空の時間を作ることで厄払いする魔除けの視点から、ゴーゴリは物語の日付（ユリウス暦のロシア）とゴーゴリが現実に意識した日付（グレ

ゴリウス暦のローマ)を意図的に混在させたとし、異稿の日付の違いを精査している<sup>15</sup>。

井上(2009)は、最初の草稿(1832-33)から『ゴーゴリ作品集』(1842)のテキストまで、5本の異稿を比較検討し、日付が複数あることから生神女福音祭ひとつに解釈の根拠を求めるのは誤りとし、「音律法と音の反復」の力動性が、生神女福音祭の連想も巻き込みつ、最終的にこの日を複数の日付から選択させたのだと説得力ある結論を導いている<sup>16</sup>。

いずれももっぱら生神女福音祭が注目されているが、3月25日はキリスト教の祝日に習合した民間の祝日でもある。キリスト教では生神女福音祭の日だが、民間では、キリスト教導入以前から「大地開きの日」という、農作業のはじまりを告げる春迎の祭りにあたっていた。この春迎の祭日こそ、ゴーゴリに恐怖を与えたものであり、鼻と結びついていたものなのである。

スラヴ民族の間では、空も地上も、そして地下も冬の眠りから覚める「大地開きの日」には渡り鳥が越冬地から戻り、地中からはヘビ、カエルなどの爬虫類・両生類、様々な昆虫がうようよぞろぞろ這い出し、チョールト(異教時代に遡る細い脚のこせこせした三下小鬼)も姿をあらわすと信じられていた<sup>17</sup>。

ゴーゴリは、それら地中から湧き出る虫、毛足類や爬虫類を、それぞれ虫酸が走るほど嫌悪していた——「アクサーコフ家の庭でバラを摘んでいた時、たまたま手の甲で黒く冷たい毛虫に触れた彼は、叫び声を上げて家へ駆け戻った。スイスで彼は丸一日陽の当たる山の小道をめぐり、蜥蜴を打ち殺して歩いた」<sup>18</sup>。

これらの生き物は、自分の鼻に異常な関心を持っていたゴーゴリを死の間際まで脅かしたのだった。

晩年のゴーゴリは、心の汚れを濯ぐため、食を絶った。『死せる魂』第1部に次々と登場する否定的な登場人物はすべからく自分の邪心のせいだと思い込んだのである。

絶食が招いた衰弱の治療のため、施されたのが瀉血療法だった。

やせ細ったゴーゴリは、屈強な男達に無理矢理浴槽に沈められると、まるまると太った六匹の蛭で血を抜かれた。作家は、鼻から下がった蛭を取るよう泣き叫んだが、手足を掴まれ、されるがままだった。

この、「鼻孔にびっしり吸いついた厭わしい毛足類を取り除けようと空しくあがいている瀕死の男」の様子にナボコフは宗教的背景を指摘している。

彼が生涯を通じてぬらぬらした生きものやちよろちよろする生きもの・爬虫類に対する格別の嫌悪感に憑かれていたこと、この嫌悪感が一種宗教的基底を有していたことを思い合わせるなら、この時彼が何を感じていたか想像できる。<sup>19</sup>

「この時」とは蛭を用いた瀉血治療の時のことであり、「宗教的基底」とは、毛足類や爬虫類への激しい嫌悪の根底、すなわちチョールト(三下小鬼)が跋扈する世界のことで、作家が何よりも恐れた地獄のことである。

つまり睡っていた大地が春の訪れとともに目覚める一年の節目、冬から夏への反転の境界である3月25日は、ゴーゴリに怖気を奮わせた世界が、表層ばかりか深層でも半世界を占める日だったのである。



目覚め、つまり眠り COH / SON の反転は HOC / NOS すなわち鼻になる。

目覚めた床屋のイワンが切り分けた大地の恵みの中から鼻が出現し、イワンが恐怖のどん底に落ちるのは、作家自身の鼻と結びついた恐怖が、創作に反映したのだろう。

鼻を捨てたイワンは、「肩から 10 プード(約 160 キロ強)の重荷がいったんに下りたような」気がした。恐怖が「10 プード」の重量でイワンあるいはイワンが捨ててに行く鼻にのしかかるのは、蜥蜴を潰して歩いたゴーゴリ自身の恐怖の反映だったに違いない。

床屋のイワンの店の看板に「瀉血もいたします」とあるのを思い出そう。

3月25日は、ゴーゴリには一方で鼻と結びついた恐怖の日だったのである。

では、目覚めたコワリョフの顔から鼻が消え、また元に戻るのも、「大地開きの日」の反転が作用したのだろうか？

万策尽き、追いつめられたコワリョフがポットーチナ夫人を疑ったのは、鼻がなくなることなどあり得ないと思っていたコワリョフの脳裏に、春迎いの祝日が過ぎたのだろう。「大地開きの日」には、述べたように、チョコレートや魔物もあらわれるので、土地によっては斧や鋤で家の周りに溝を掘り、魔女達の侵入を防ぐ魔除けの習慣が守られる場所もあった<sup>20</sup>。

しかしながら夫人は白だった。コワリョフの誤解を証明するこのエピソードは、コワリョフに作用したのが「大地開きの日」ではないということを、すなわち「大地開きの日」とともに3月25日の半世界をなす「生神女福音祭」の反転だといいたかったのではないか。

この日、教会では聖母マリアの懐胎を記憶するため、極めて重要な儀式である聖体礼儀が執り行なわれる<sup>21</sup>。

大天使ガヴリエルから、救い主の母になるだろうと伝えられたマリアは、身に覚えのないことに戸惑いつ、天使の言葉を肅々と受け容れたのだった。教会はマリアの恭順を、原罪を犯したエヴァと比べ、あらゆる罪を償い、人類の救済を実現するものとみなし、マリアを「新しいエヴァ」とした。このことは記憶され続け、生神女福音祭は、9ヶ月後の降誕祭と共に12大祭のひとつに組み入れられているばかりか、復活祭より重視される土地もある。

「新しいエヴァ」の祭りは新たな創造の日であり、「神の人間化の物語が、すなわちイエスの地上生活がはじまった瞬間」、あるいは天が地に、地が天に変わった反転の日なのである<sup>22</sup>。

それゆえコワリョフは、目の前に止まった箱馬車から自分の鼻が制服姿で飛び出したのを見たとき、「すべてが目の前でひっくり返ったような気がした」のである。コワリョフの第六感はなかなかのもので、区警察所から新聞発送課に馬車を回したのも天のお告げを感じたからだった。

しかしながら、なぜ生神女福音祭の反転の原理が、ほかでもない、コワリョフの身体の一部である鼻に作用し、分離して5等官のなりで歩き回るのだろうか。

興味深いのは、5等官の鼻が鳥を彷彿させることである。

ロシア語の HOC / NOS には「鳥の嘴」の意味もある。5等官の鼻は顔よりも大きい。そのバランスは、ゴーゴリの苗字の由来ホオジロガモのそれである。

鳥の中でも頭の割に嘴が大きいカモは、作家本人が自分の鼻を「鳥のように、長くて、とがっている」と気にしていたこともあって両者はしばしば重ねられることがある。

ゴーゴリ生誕 200 年を記念して製作されたドキュメンタリー映画も『ホオジロガモという

名の作家ゴーゴリ』(2009)というタイトルだった。

「ホオジロガモのように歩く」という言い回しは、「威張って歩く、もったいぶる」という意味だが、もったいぶって歩く5等官の鼻の姿は、なめし草のズボンも鳥の脚のようだし、腰に差した剣は、祈りの際には尾羽のようでもある。

カザン聖堂で祈る鼻は、腰から上を折るようにして頭を低くしている<sup>23</sup>。羽根飾りの帽子を被った頭を何度も低くするお辞儀は、まるで餌をついばむ鳥である。

リガからカムチャッカに至る広範囲に生息するホオジロガモは、冬は黒海やカスピ海すなわちコーカサスで越冬し、春の訪れとともに営巣のためにいち早くロシアに戻ってくる。

コワリョフは大学出の正真正銘の8等官ではなく、それこそコーカサス上がりの怪しい8等官だった。語り手は皮肉っていう。ロシアの8等官というのは、8等官が話題になると、「リガからカムチャッカに至る」すべての8等官が、自分が話題にされていると思うのだ、と。

「コーカサスの8等官」コワリョフが必要に迫られて（栄達と結婚は、鳥に喩えていえば営巣である）コーカサスからペテルブルクにやってきたのも、鼻が高飛びしようとした先がリガだったのも理由あつてのことだったのだ。

しかも鼻を失ったコワリョフはこう呟く。「鼻がなくなったら、人間は一体何だかさっぱりわからん。鳥のようで鳥でない、都市住民のようで都市住民でない。そんなものとお捕まえて窓の外に放り投げてしまえ」。

注目したいのは、「とお捕まえて窓の外に放り投げ」る行為である。これは生神女福音祭の伝統行事を彷彿させる。

春の訪れを待ち焦がれ、「大地開きの日」を最も喜ぶのは鳥とされ、生神女福音祭は「鳥の祭り」といわれることもある。教会で今も続く伝統行事は、野山や森で捕まえた鳥を籠から放つ放鳥である。

5等官の鼻（嘴）には放鳥された鳥のイメージが重ねられているのではないか。

8等官のコワリョフを笑う5等官の鼻は、コワリョフの分身的存在である。掲載を渋る新聞社の広告係に向かって「僕自身の鼻の広告だよ。つまり僕自身と同じじゃないか」、と食い下がるコワリョフが5等官になれば、同じ態度をとるのは火を見るよりも明らかだ。

鼻が自立し、人格を持つ話は、素朴な民衆版画ルポークにもとりあげられていて珍しいことではないが<sup>24</sup>、ゴーゴリの場合は鼻がちよん切られている。

鼻のない人間は「鳥のようで鳥でない、都市住民のようで都市住民でない。そんなものとお捕まえて窓の外に放り投げてしまえ」というコワリョフの呟きに、生神女福音祭の反転の原理が作用し、コワリョフの意識を宿した鼻が、鳥籠から放鳥された鳥のようにコワリョフから自由になったのではないか。

飛ばずに歩くのは、表敬訪問に忙しくしているからである。この日に働くのは大罪とみなされた。うっかり巣を作った鳥は、神に羽を取りあげられ「しばらく飛べなくなって地上を歩かなくてはならなくなる」のだ<sup>25</sup>。

コワリョフの顔から自立したNOS（鼻・嘴）が、コワリョフの細胞から分裂した都市住民にも、また鳥籠から放たれた鳥にもなれることは、細胞と鳥籠が、同一の単語 *клетка* / *kletka* であることも証左のひとつになるだろう。

放たれた鼻が、それこそ鳥のようになって、またペテルブルク市民のようになってコワ

リョフを笑うのは3月25日の理に適ったことなのである。

ではなぜ鼻が戻るのだろうか。

放鳥の伝統が今も変わらず続いているのは、鳥籠から放たれた鳥は、籠から出して自由にしてくれた人を、その人になり代わって天の神の前で執り成し、幸福をもたらしてくれると信じられているからである<sup>26</sup>。

鼻が戻るのは、鳥のようなコワリョフの分身の祈りも神に届いたのだろうか。それゆえ「新たなエヴァ」の祭りの翌日にコワリョフの顔に新しい鼻が下がるのである。

第3章で語り手は、コワリョフの顔に同じ鼻が戻ったと知っているが、そうではない。もともとあったコーカサスの、左側に吹き出物のある、臭い鼻とは違う新しい鼻だと召使いのイワンが証言している。

コワリョフがイワンに向かって、吹き出物があるようだといって鼻を見せると、イワンは、「どこにもありませんですよ、吹き出物なんて。お鼻はおきれいです！」(拙訳)と返している。

生神女福音祭の日にペテルブルクでコワリョフの顔から自由になったNOS(嘴)が、本人に成り代わってカザン聖堂で神に執り成し、聞き届けられたので、エヴァが新しく蘇ったように、「早くも4月7日に」(拙訳)つまり祭日の明るる日に俗物コワリョフの顔に吹き出物のない、ペテルブルク市民に相応しい新しい鼻が蘇ったのだ。

その後、鼻が逃げだす素振りすら見せなくなったのは、眠り／SONと鼻／NOSが日常を取り戻して融合した「SNOSNO／なかなか」鼻だったからである。

こうして晴れて都市市民の仲間入りが果たせたコワリョフは、さっそく、自分もされたようにボタン鼻を意地悪く笑い、表敬訪問をはじめるのである。

鼻は、ある！彼は、うきうきと後ろを振り返ると、いくぶん片目を細めてから、そこにいたふたりの軍人に皮肉の一瞥をくれた。そのうちのひとり、どう見てもチョッキのボタンより大きめとはいえない鼻をしていたのだ。それから、彼は、副知事の地位を、それがだめなら庶務監督官の地位をと予てから駆けずり回っていた彼の局の事務部へ出掛けた。応接室を通りながら、彼は鏡を覗いた。鼻は、ある！

冒頭の日付が複数存在するのは検閲を意識してのことだろう。異教の半世界を想起させ、教会と同一視されるパンから鼻があらわれる物語が、検閲を通らないだろうことはゴーゴリの予想の範囲だった。カザン聖堂をカトリックの教会にしてみたもののやはり認められず、ゴーゴリはさらにゴスチーヌィ・ドヴォール(百貨店)への変更を求められた。

神の子の懐胎を記念する日と3月25日を結びつけるカザン聖堂が、最初の草稿で予定したようにテキストに記されるのは、「宗教はアヘン」とした革命を待たなくてはならなかった。

#### 4. ゴーゴリのペテルブルク神話

床屋のイワンが切り分けたパンから顧客の8等官コワリョフの鼻が出現した。冤罪の恐怖が威圧的人工都市ペテルブルクを呼び出すいっぽう、鼻を失い恐怖に陥るコワリョフの前に

5等官のなりをした鼻（願望の分身）が現れ、自然の喪失に無自覚な都市住民の代表のように持主コワリヨフを嘲笑する。

ペテルブルクを映し出す「鏡」として鼻が選ばれたのは、ゴーゴリが自分の鼻に恐怖や願望といった内面ばかりか、冒頭で述べた、祝祭日の反転の原理（グリャーニェの「あべこべの世界」）との強い結びつきを感じていたからだった。

反転の日のはじまりを告げるため、ゴーゴリは目覚めを強調し、眠り／SONから鼻／NOSを呼び出した。世界が反転・逆転する神話的相対世界をペテルブルクで再認させようとしたのである。

3月25日の生神女福音祭と習合した「大地開きの日」は、ゴーゴリが嫌悪し怖れた、虫、爬虫類、悪魔が目覚める一年の節目であり、冬から春に、死から生に反転する境界である。

生神女福音祭は、天が地になり地が天になる日で、放鳥した鳥が願いを叶えてくれる日である。俗物コワリヨフの顔に新しく鼻が下がるのは、鼻＝嘴の執り成しだったのである。コワリヨフの歓喜は、ペテルブルクで痛い目に遭ったゴーゴリが、ローマで感じた安堵の反映だったのかもしれない。

鼻の出没が荒唐無稽な出来事、ナンセンスであることは認めたくなくて、語り手が、それでも「誰が何と言おうと、この類の事件は、この世にあるのだ。めったにないが、それでもあることはあるのだ」と物語を結ぶのは、生神女福音祭を持ち出すまでもないだろうといわんばかりである。

『鼻』のルーツをシャミツソーの『影をなくした男』やスターンの『トリストラム・シャンディ』、『センチメンタル・ジャーニー』、ホフマンの『大晦日の夜の冒険』に求める向きもあるが、民俗学に造詣の深かったゴーゴリは、「奇怪このうえない」出来事を、自身の鼻コンプレックスと伝統的なスラヴの祝祭日から発想したと考えると牽強附会ではないだろう。

人工都市と自然の闘争を、身体を触媒にして表現したゴーゴリの『鼻』は、プーシキンが『青銅の騎士』で描いたペテルブルク神話の再認だった。プーシキンが『青銅の騎士』で小役人エヴゲーニの身体を介して洪水（自然）とペテルブルク（人工）の闘争を再現したように、ゴーゴリは鼻でペテルブルク神話を再認させるとともに、人工都市で自然の反乱に見舞われる愛すべき俗物たちあるいは「小さき人」を描いたのである。

## 註

作品からの引用は、明記されていない限り、井上幸義『ゴーゴリ『鼻』全文読解』（ナウカ出版）に拠った。記して謝意を表す。

1 ツヴェタン・トドロフは、意図せずに寓意が展開してゆく『鼻』は、「二〇世紀における超自然文学がいかなるものとなるかを予告している作品」であり、「ゴーゴリが主張しているのは、たしかに、無＝意味ということなのであった」と述べている（T・トドロフ『幻想文学 機能と構造』渡辺・三好訳、朝日出版社）。また、ゴーゴリはロマン派の幻想をパロディによって改変したと言うユーリー・マンは、両者を次のように比較している。「だれに言えるだろう、

- 邪悪な、非合理的な力の具体的な担い手（ホフマンの *das böse Prinzip*）を潜ませている謎と、いたるところに隠れており、同時にどこにも隠れていないような謎、水が綿にしみ込むように生の中にしみ込んだ非合理性と、いったいどちらが恐ろしいか？」（『ファンタジーの方法』秦野訳、群像社）
- 2 クルガーノフによれば、プーシキン時代のアネクドートは、アリストテレスの弁証法でいう「省略三段論法」のひとつだという。客観的事実だけではもはや十分に審議を尽くせなくなった場合には、たとえそれが異例きわまりない逆説だろうと、容易に相手を納得させ、「信念すら覆す」条件つき演繹法によって、「ありうる」と思わせるような「相対的状况」の「設計」が必要になる。ゴーゴリはその設計に長けていた。（*Курганов Е, Анекдот-Символ-Миф*. СПб., 2002. С.20-22.）
  - 3 拙著『ペテルブルク・ロシア 文学都市の神話学』（未知谷、2014年）を参照されたい。
  - 4 ナボコフ『ニコライ・ゴーゴリ』青山太郎訳、平凡社、1996年、16頁。
  - 5 後藤明生『笑いの方法』福武書店、1990年、239頁。
  - 6 ゴーゴリ『鼻』工藤正廣訳、未知谷、2013年、61-62頁。
  - 7 プリーシヴィン『巡礼ロシア』太田正一訳、平凡社、1994年、18頁。
  - 8 ナボコフ前掲書、17頁。
  - 9 ゴーゴリの時代の官等は「秩序」という原義を離れて「紙の上の約束ごとの官僚主義的な秩序」になってしまったと言うロートマンは、官等が「空虚なもの、言葉、幻である」ことをゴーゴリの登場人物たちは感じ取っていて、人生が官等という幻に支配され、操られているという思想がゴーゴリの中心思想のひとつだと指摘している（『ロシア貴族』桑野ほか訳、筑摩書房、1997年、40～41頁）。
  - 10 *Дилакторская О.Г.* Фангастическое в повести Н.В. Гоголя «Нос» // *Русская литература*. Л., 1984. №1. С.155
  - 11 *Успенский Б.А.* Время в гоголевском «Носе». («Нос» глазами этнографа) // *Историко-филологические очерки* М., 2004. С. 53.
  - 12 青山太郎『ニコライ・ゴーゴリ』河出書房新社、1986年、185頁。
  - 13 以下を参照。*Писарькова Л.*, Чиновник на службе в конце XVII — середине XIX века // *Отечественные записки*. М., 2004. №2. С.358-370.
  - 14 ゴーゴリのペテルブルクものにとっての官等の重要性については、ロートマン前掲書第一章を参照されたい。
  - 15 *Успенский Б.А.* Указ. соч. С. 55.
  - 16 井上幸義「ゴーゴリの『鼻』における鼻失踪事件の日付と固有名詞変更の謎」// *Bulletin of the Faculty of Foreign Studies, Sophia University*, №44 (2009)
  - 17 *Шапарова Н.С.* Краткая энциклопедия славянской мифологии. Москва, 2001. С.94.
  - 18 ナボコフ前掲書、19頁。
  - 19 同書、17～18頁。
  - 20 *Шапарова Н.С.* Указ. соч. С.96.
  - 21 クリメント北原史門『正教会の祭りと暦』群像社、2015年、45頁。
  - 22 *Шапарова Н.С.* Указ. соч. С.94.
  - 23 ここで用いられている *отвешивал поклоны* という表現は、「腰から体をふたつに折り曲げて低くお辞儀をする」という意味である（井上幸義『ゴーゴリ『鼻』全文読解』、71頁）。
  - 24 鼻は人相学でもしばしば人格が投影されるし、ふだん何処か身体の名をあげてその人物を指すことも珍しくない。ルボーク「鼻と厳しいマロースの珍事」では持主の道化ではなく鼻が自立した人格を持ち、擬人化されたマロースと話をしている。A・プレトニョーフが指摘

するように、『肖像画』などでルボークに言及しているゴーゴリは、このルボークにインスピレーションを与えられたのかもしれない。(Пленнёва А., Повесть Н.В. Гоголя Нос и лубочная традиция// Новое литературное обозрение. М., 2003. № 61.)

ただルボーク「鼻と厳しいマロースにかんする出来事」はゴーゴリの鼻のように切断された鼻ではないし、マロスコという厳寒の化身がいるようにロシアでは自然は擬人化されるので(コンラッド)、ゴーゴリが鼻を選択した理由をこのルボークひとつに求めるわけにはいかない。

25 Шапарова Н.С. Указ. соч. С.95.

26 Зеленин Д.К. Избранные труды. Статьи по духовной культуре 1934-1954. М., “Индрик”, 2004. С. 237-242.